第 18 回研究会

2024 年 12 月 28 日

今回のスパルタンイングリッシュでは、青森市立筒井中学校に勤務されている北向周平先生の授業をご紹介しました。北向先生は、今年採用されたばかりの初任教諭であり、弘前大学教育学部の卒業生でもあります。先日、北向先生から「初任者研修の研究授業が終わったので、授業を見てもらい今後の指導についてアドバイスをいただけないか」とご連絡をいただきました。そこで、「私一人で見るのもいいけれど、スパルタンイングリッシュで授業を公開して、多くの先生方から意見をいただいてはどうか」と提案したところ、快く了承いただきました。

授業の腕を磨くには、丹藤先生もよくお話しされるように、経験豊富な先生に見てもらい、具体的なアドバイスを受けることがとても大切だと思います。私自身も若手の頃に長先生や杉本先生をはじめとした多くの先生方に授業を見ていただき、たくさんの貴重な助言をいただいた経験が、今でも支えになっています。授業を公開することは大変勇気のいることですが、北向先生から事前にいただいたメッセージには、「目の前の生徒たちのために、より良い授業をしたい！」という熱い思いと責任感がにじみ出ていました。その熱意が伝わったのか、12 月 28 日という年の瀬にもかかわらず、北海道から愛知県まで全国各地から合計 19 名が参加。さらに、サマーセミナーで講師をお願いした英語授業研究会の杉本薫先生（元東京都立両国高等学校附属中学校）が「オンラインでは伝えきれないので、ぜひ直接会場でアドバイスをしたい」と対面でご参加くださいました。北向先生いわく「恐れ多いけれど嬉しさも感じる」、そんな思いが詰まった勉強会となりました。

授業について

対象学年

中学 1 学年

内容

目標文型：疑問代名詞の whose（BLUE SKY English Course 1 Let’s Talk 4 誰のもの？）

授業者から

- 普段の授業では、佐藤先生の授業スタイルを参考にし、生徒の活動時間をできるだけ確保することを心掛けています。また、適切な場面・目的・状況を設定することを意識しています。今回の研究会では、皆さんに以下の 2 点についてご助言をいただければと思っています。

① 場面・目的・状況の設定について

この授業では、「北向先生が部屋の掃除をしていたら、中学生の頃に使っていた歴史の教科書が出て

きました。懐かしみながらページを開くと、歴史上の人物が書かれたページが穴あきになっていたので、その人物の顔のパーツを当てよう」という流れになっています。Whose を使う場面として、この設定が本当に適切か、オーセンティックであるかについて意見をいただきたいです。

② 時間配分について

本筋の活動に入るまで約 20 分かかっているのですが、その時間配分は適切だったでしょうか？私の授業では、「挨拶→スモールトーク→ビンゴ→ディクテーション」と、導入部分にかなりの時間を割いています。勤務先の先輩からも「ビンゴやディクテーションを毎回行う必要があるのか、その時間をもっと本筋の活動に使えないか」と指摘されたことがあります。この点についてアドバイスをいただけるとありがたいです。

- 上記以外にも、私の授業を見ての感想やアドバイスがあれば、ぜひ遠慮なくお聞かせください。「これは良くない！」や「これでは生徒がかわいそうだ！」といったご意見も大歓迎です。よろしくお願いいたします。

1　帯活動　Routine Work

(1) 英語であいさつし説明を聞く
(2) What day?
(3) BINGO
(4) Last Sentence Dictation

フロアからの意見・質問

（丹藤先生）

ひとつは「授業の構成」、そしてもうひとつは「構成要素」を別々に考えることが重要です。ねらい＝目標と評価は一貫していなければなりません。1 時間配当の単元構成で 50 分という時間制約を踏まえたとき、この授業構成は適切かどうかが議論のポイントだと思います。この授業の最初に行われている 4 つの活動は、今回の授業のねらいである「Whose を使って、歴史上の人物のどのパーツかをクラスメイトと尋ね合おう」とは直接的に関連がないため、50 分の授業時間の半分近くである 20 分をその活動に使うことについて、やはり疑問が残ります。

また、学習課題―つまり本時のねらい＝目標である「歴史上の人物のどのパーツかをクラスメイトと尋ね合おう」と、まとめ＝本時のゴールである「誰のものかを尋ねるときに Whose を使う」の一貫性が欠けている点も気になります。

最後に、初任 1 年目ということで、佐藤先生の授業パターンを真似するのは自然な流れかもしれませんが、それを無批判に受け入れるのではなく、時には批判的に捉えることも大切です。例えば、BINGO を行っている場面ですが、現在の学習指導要領の考え方を考慮すると、こういった活動は家で行うべき、つまり生徒が自力でできることは家庭学習でやらせるという発想が求められるのではないでしょうか。

（杉本先生）

活動のねらい＝その活動を行う目的をしっかりと踏まえて行うことが重要です。例えば、Last sentence dictation の前に練習として書かせる時間を設けていますが、実際に Last sentence dictation は「書けるようになる」ことを目的とした活動ではありません。むしろ、その活動の真の目的は、教科書の既習の部分を何度も音読させることにあります。音読を繰り返すことで、教科書の英文に慣れ親しみ、その結果、読まれた英文なら自然に書けるようになります。重要なのは、そのために何度も読ませることです。ですので、練習時間は書くことに費やすのではなく、音読を行うように指示した方が良いと考えます。私も長先生も「☆読み」という取り組みを行い、教科書全体を読み終わるまで何度も読み返すことを推奨していました。このような音読を重視した取り組みが、生徒の定着を促進します。

（佐藤）

ピザチェーンの日での「What day?」の英語は、「When you buy L size pizza, you can get M size pizza for free. So, if you buy L size pizza, you can get two pizzas for free。」のように、中学校一年生にしてはやや難しい表現を使っていますが、それでも生徒たちは「意味がわからない」「何言っているのか分からない？」とならずに、あきらめることなく、何となくこういうことを言っているのだなと聞き続けています。これは、「What day?」という活動を毎日の授業で継続してきた成果です。

また、small talk の前に、「Really? Is that so? Me, too!」などのリアクションを確認していると、実際に生徒たちはそのリアクションを活動中に使うことができており、指導したことが生徒にしっかりと身についている様子が見られます。これは素晴らしいことであり、北向先生の指導に生徒がきちんとついてきている証拠です。

一方で、アドバイスとしては、「What day?」に限らず、スモールトークを疑問文で始めなければいけないという固定観念から脱却することが重要だと感じます。今回も「What pizza shop do you like?」という疑問文をコーラスでリピートし、多くの生徒たちはそれを一言目にスモールトークを始めましたが、むしろ肯定文で「I like Domino's pizza.」や「I like cheese pizza.」と切り出す方が、話題が広がりやすく、生徒にとってもより楽で自然です。例えば、ピザが苦手な生徒も「I don't like pizza, but I like hamburger.」と言うことができますし、「I don't go to pizza shops. I go to gyudon restaurants.」とも話題を展開することができます。何より、日常的な会話やオーセンティックな状況を考慮すると、「やあ！どこのピザ屋さんが好きですか？」といきなり質問するよりも、「やあ！僕はドミノが好きなんだけど、君は？」と聞く方が自然です。ぜひ、肯定文スタートの「What day?」を試してみてください。

2　展開

(1) オーラルイントロダクション

- パワーポイントを使って、イラストや写真を提示しながら、北向先生が掃除をしていたら、中学生の頃に使っていた歴史の教科書が出てきたというストーリーを展開する。懐かしみながらページを開くと、そこには歴史上の人物が紹介されたページがあり、なんとそのページに穴が開いているのを見つけた。

- その後、「このページの穴は何だろう？」と問いかけ、生徒と一緒にその穴が開いている人は誰なんだろうと考える。すると、穴が開いた部分が歴史上の人物の顔や体の一部であり、その人物を当てるゲームが始まる。
- 「どの歴史上の人物のパーツかをみて、当ててみよう！」というやりとりを生徒と行う。生徒たちは、自分たちの知識を活かしながら、歴史人物を推測する。

(2) パワーポイントを使ったパターンプラクティス

教　師：（歴史上の人物の顔の一部を表示して）Whose nose is this?

生　徒：（一斉リピート）Whose nose is this?

教　師：列指名

生　徒：（個別でリピート）Whose nose is this?

教　師：It's Himiko's.（答えを言う）

の流れで今回の目標文型である Whose ○○ is this?／Whose ○○s are these?の英文を生徒に繰り返し言わせる。

(3) ゲスゲーム

- ワークシートを配布して，Whose ○○ is this?／Whose ○○s are these?の英文をペアで聞きあう。1回ごとに席を前に移動することでペアを変えながら 5 回実施。

(4) 文法のまとめ

- 「誰の？」と聞くときは Whose と名詞で表すこと
- 答えるときは，持ち主's で答える
- 名詞がひとつの時は Whose ○○ is this?と聞いて，　It's ○○'s.と答えます。
- 名詞が 2 つ以上の時は Whose ○○s are these?と聞いて　They're ○○'s.と答えます。

(5) 振り返り

- クロームブックを使って振り返り
- 早く終わった場合はワークを進める時間

（丹藤先生）

「北向先生が掃除をしていた際、中学生の頃に使っていた歴史の教科書が見つかり、ページを開くと、そこには歴史上の人物が紹介されているページがありました。ところが、そのページには穴が開いていて、『これ、誰？』という疑問が浮かびました。」という場面設定は、果たして日常的に起こり得る状況と言えるのでしょうか？教科書には、登場人物が学校の傘立ての前で『誰の傘だろうね』と会話するシーンがありますが、教科書というものは、多くの先生方の意見を反映して作られたものです。そのため、教科書の場面設定や内容を活用する方向で考えるのが、より適切かもしれません。

（杉本先生）

Whose の後に続く名詞や、その後に必要となる名前（例えば、Einstein や Perry など）が複雑で、そこを指導するのが難しく感じます。自分が同じような題材でゲスゲームを行う際には、Whose *nikujaga* is this?という疑問文を設定し、It's ○○'s.という形で答えを作ります。その○○に入る人物の名前としては、教科書に登場する人物を使用しました。

（佐藤）

僕自身、Whose を使った授業を公開した経験がありますが、Whose を自然に使う場面設定は非常に難しいと感じました。当時、どうしても場面設定が思いつかず、職員室の給湯室にある学年の先生のカップを題材にして、Whose cup is this?という会話にしました。しかし、カップを見て、それが誰のものか当てるという状況が日常的にあるかと聞かれれば、それは非常に難しいと感じました。

（参加者）

振り返りでどのようなことをしているのか？

（北向先生）

全校統一で使用しているフォームに授業の振り返りを各自で記入している。終わった生徒はワークを進めるようにしている。

（佐藤）

確かに、1 時間しか配当していない授業計画の中で、つまり、この時間で Whose を指導しなければならないという状況で、ルーティンワークに 20 分、振り返りに 10 分を使い、Whose を聞いたり話したりする活動に 20 分弱しか割けないのは、アンバランスに見えてしまうのも仕方がないと思います。

（杉本先生）

まとめとして、Whose の使い方と答え方を日本語で説明していますが、このタイミングでは早すぎると思います。もっとたくさん使ってみて、ある程度時間が経った後に説明するべきだと感じます。初めて扱って、ちょっと使ってみただけの段階でまとめるのは難しいのではないかと思います。

ここで，北向先生が事前のコメントで寄せてくれた，20 分のルーティンワークが長すぎるのではないか？ということについて，杉本先生から「授業のレイアウト」そして「授業を編む」と題してお話いたしました。詳しくは配布資料をご覧ください。

杉本先生の配布資料①「授業のレイアウト」

杉本先生の配布資料②「授業を編む」

おわりに

北向先生と言えば、卒業時に「厳しい環境に自らを置くことで、しっかりした自分になりたいと思い、このゼミを選びました」と話していたことを思い出します。その時、私は「僕のゼミは山寺の修行か！？」とツッコミを入れた記憶がありますが、北向先生が社会人一年目という多忙な中でも自分を律し、向上心を持ち続けて授業の腕を磨く姿を見て、ちょっと胸が熱くなり、目じりがかすんでしまいました。

最近、私が危機感を抱いていることは、教員が多忙を理由に授業をパッケージ化する動きが過度に高まっていることです。杉本先生のお言葉でいう「おしなべて、一律に教えなければならない」という強迫観念や、「一律に教えることに安住する精神構造」に陥ることです。教科書にしろ、指導法にしろ、この形でやれば OK のような一つの型・フォーマットにはめ込もうという流れになっていると感じます。以前の研究会でも、「スモールトークのネタを探すのが大変だから、365 日おすすめの話題例を本にしてはどうか？」という意見に対し、丹藤先生が「そういうことは、先生が目の前の生徒を見ながらやるべきところで、先生として最も面白い部分なのに、それを外注するとはどういうことか」と言われたことも、まさにこの点に通じると思います。

そんな中、北向先生は大学時代からさまざまな勉強会に参加し、本などから得た知識を自分なりに取り入れ、目の前の生徒の英語力をどうすれば高められるかを常に考えてアレンジしてきました。さらに、今回のようにその授業を公開し、アドバイスを受けながら主体的に授業をカスタマイズしようとしています。その姿勢を背中で見せることで、生徒にも成長の大切さを伝えている北向先生から、教師としてのあるべき姿を学ぶことができました。何年か経った後には、ぜひまたこの研究会で授業を公開してくださいね。北向先生の成長した姿と、さらに進化した授業を拝見できる日を楽しみにしています。

（文責：佐藤　剛）